



行發日十二月九 刊休日翌日祭曜日

歌謡

小説

伊納川 銀

六

新歌壇

小山田 滋選

歌川 幸子

潮聲視静抄帳

あしき人

幕末神風組

講談

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

社會の今日

僕は立ち上りざま思ひ切く抱いたが、直ぐそのまゝつてひろ子の頭をぼつとたたきつけ、十割のひかりの影を無く泣ききつた。君に、僕の氣持が判つてたまるものか!

此の世を果つる 黒髪の亂れて細き 息づかひ 瘦せたる腕に 力こめ 我が手をにぎり 物言はず

父も倒れて 母はいま 同じ病の 床に泣く かなたに 残る かんざし

へえ、め、めは接尾語、橋岡地方のこに近しい。親愛の意がこもつてゐる。おとめのももこれと同じものであらう

平地方の方 盛岡 高木 稻水 十二

れこそ母の身を切らるる苦痛で無くて何であらう。故郷を遠く離れ、氣候も習慣も全く違ふ北國の冬に、一切の不安と寂寥をふり捨てて嫁いで行つたのは、ただひたすらな夫への愛情の爲ではなかつたか。それを不圖した風邪が思ふよも見たことのない恐ろしい病氣に夫を叩きつづし、命をかけての看護に叛いて、子供をたのみ残して敢て死して行つたのである。茫然と夢見の氣持の中に残された子供二人と自分の生活に氣附いた時、耐へられない絶望がどれ程か泣かされた事だらうか。その上いつのまにか感染した夫の病氣、二人の子供のいぢらしさにかけて、姉の心は狂つた。秋男は夫の母に、姉は俊子の手を取つて父母のもとに病め深む紅葉の頃、小川の光が黄色い葉を忙しく照り返してゐる頃だつた

あしき人 眞沙 夫 向ふの丘に私の視線がさしやがれた時、私にその視線の中に働いてゐる秋男の死の秋男の死

幕末神風組 高根秀浩 幕末、幕府の重臣たちの大部分は、大坂の様に寄せた来る時代的な流れ、武家政治の没落を許さずと豫感し乍ら、心はいつしか尊王派に傾きかけてゐた

社會の今日 中村けいり 母上が艶なき髪を梳きたまふ手細りにかける秋の日

平地方の方 盛岡 高木 稻水 十二

彼等は剣をとるより外に何等食を得る道が知らなかつた。よしんば武士階級が崩壊してしまつて、さて彼等が自分自身のみで生かして行くの間に色々の準備を整へておくとする事は、確に當たつた

社會の今日 中村けいり 母上が艶なき髪を梳きたまふ手細りにかける秋の日

社會の今日 中村けいり 母上が艶なき髪を梳きたまふ手細りにかける秋の日

社會の今日 中村けいり 母上が艶なき髪を梳きたまふ手細りにかける秋の日

社會の今日 中村けいり 母上が艶なき髪を梳きたまふ手細りにかける秋の日

洋食道具一式 格安御譲致し度し 御希望の方鳥羽方に御來談下さい。 鳥羽 菊 電話二八六番

生花教授 池ノ坊流 生花を懇切丁寧に御教授いたします。 須藤 まつ子の

川井内科診療所 専門 一般内科 呼吸器病 バカリデハアリマセン 平町南町六五(電話一八一番)

山内醫院 平町田町七〇番地 醫學士 山内亨吉 電話六九一番

鈴木醫院 日本齒科 鈴木喜政 平町南町六五(電話一八一番)

吸入用酸素 純度99% 体温器 寒暖計 關内藥局 電話四〇〇番

小兒科・内科 特ニ乳幼児ノ健康相談ニ應ズ。 平町。ねずみ坂 渡邊醫院 電話一六一番

大和田醫院 耳鼻咽喉科専門 氣管食道科専門 平町南町(電一〇七番)

阿部材木店 建築材 平町南町(電話四九四番)

上田醫院 入院隨意(自炊の便あり) 外科 線科 平町南町(電話二二九)

日の出磨粉は ニューム、眞鍮、ニツケル、銅、グローム、砲金、洋白瀬戸物、油物食器、鏡、硝子、自轉車、自動車 芳賀商店

